第二十八卷　第二號

メラネシアの新生

村上次男

緒言

今日では地球上の殆ど全部を蔽ふ人類居住地Ökumeneの中で、最も置き忘れられた場所――その重要な一つは、所謂メラネシアMelanesiaの諸島嶼ではないだらうか。

之等メラネシアの島々が、わが皇國に隣接して存在し且つ樞要の地大東亞海地域とその自然的配置に於いても密接な連結を有してゐるにも拘らず、世の人々の注目を惹かなかつた事は悲しむべき現實であつた。それ等の島の殆ど反對の側に居住する歐洲人共と全く軌を一にした態度を以つて、日本人がメラネシアに臨んでゐた事――それは正に歐洲中心の地理觀に心醉してゐた、即ち學術思想戰に明瞭な敗北を示してゐた嘆かはしい事態に外ならない。

新しい現實は新しい觀念と緊密に熔け合ふ。勿論新しい觀念は唐突に出現したのではなく、神代から連綿として發展的に受繼いだものに外ならないが、われわれの思想的敗北の時期に對して、新しいと言ひ得よう。現今日本人の世界史的自覺にはなほ古い觀念の綴り合せに過ぎないものが全くないであらうか。メラネシアに對する怠慢はそのやうな古い觀念の中に胚胎してゐた。然乍ら群盲の中にあつて、幾人かの炯眼なる愛國の士が思想的反擊の爲の警鐘を打ち鳴らした事は、われわれの大いなる

幸せでなければならない。而して戰爭はその輝かしき戰果と共に、思想の戰ひにも優勢を與へたのである。然乍ら未だ地理觀の危機は過ぎ去つたのではない。古い觀念はなほ此の時代に强引にもその坐席を占めんと理論づけにあくせくしてゐる傾向がある。その限りに於いてメラネシアも亦、眞の姿を妖雲の中に潛めんとするのである。

昭和十七年八月七日、メラネシアの一角ソロモン群島に擧がつた凱歌はメラネシア新生の鬨の聲でもあつたのである。今やメラネシアは隱蔽の覆ひから解き放たれて、日本の眼を浴び、全く新な眞實の裝ひを示し始めた。その明粧は單に歐洲人に取つて代つて日本人によつてなされるのではない。それはメラネシアが誤らざる眞の樣相を示し、土地の潛勢力が全力を擧げて人類に貢獻するのでなければならない。誠に戰爭は偉大なる創造である。土地の現狀を合理づけ維持するのを事とする從來の地理學から、一歩進み出て、眞の僞らざる姿の探究並にその實現を期する時、永遠なる生成發展の戰ひが前提となつて現れるべきを知るのである。そしてその戰ひが勝ち拔かれる時にのみ、斯く在るべき姿の具現が齎らされ、われわれの使命が全うされるのである。此の意味に於いて當來の地理學は戰爭と密接不離の關係に立つと言はねばならぬ。

メラネシアの地域は現在重要な戰略地點となつてゐる。その一事だけからも充分に全國民の視線を受くべき資格があると言へよう。更にそれがわが皇國に隣接して居り乍ら、歐洲人によつて最も放置された場所として、一層の注意を拂ふべき必要があらう。

一　メラネシアの範域

廣大な太平洋空間に碁布された無數の島嶼は大洋洲 Oceania としてアジアから分離された。斯かる分離の不當性は既に和田俊二氏に依つて指摘された。①しかもその樣な分割が合理的なものとして觀念された所に、政治的策略の手段として用ひられる危險があつた。更にそれ等島嶼をポリネシア Polynesia ミクロネシア Micronesia

及びメラネシアに區分する慣習も決して妥當ではない。[2]その區分は人種的差違に根據を有してゐるやうである。然乍らその人種學こそ最も白人の優位を基礎づけ、世界のあらゆるものを歪曲する根底の武器であつた事に思ひ至れば、甚だ戒心を要する事と言はねばならぬ。太平洋諸島の原住民をポリネシア人及びメラネシア人、その混合としてミクロネシア人と、この三者に分類する說は殆ど無批判に世界に流布された。然乍ら人種的形態學的に[3]明白な相違は決してそれ等三者の間には存在しない。しかもオーストラリア原住民とメラネシア人とすら、多くの形態學的特徵に於いて近似を示してゐる。[4]正に「海流と季節風とは太平洋の島々に住民の移動を甚だ容易にしたが爲に、今では混交甚だしくして殆ど一人種と見做して大過なきに至らしめてゐる。アフリカのマダガスカルより米大陸に至るまで、太平洋の眞只中を東西に横切つて一つの『南島語』が擴がつてゐることを思ひ浮べればよい」[5]のである。よしメラネシア人とポリネシア人との差違を認めたとしても、メラネシア地域に多くのポリネシ

ア人の居住と混合[6]が見られるのであり、それが太平洋諸島を分離せしめる根據たり得ないのである。逆にメラネシア人の痕跡は太平洋諸島の最東端をなすイースター島 Easter I. にも見られると言はれる。[7]その他民俗による區別も同樣に不明確であり、殊にそれが人類學や神話學や民俗學の對象として珍重されようとも、原住民の實態はキリスト教化と共に著しい變貌が行はれてゐて、人類學等は博物館內の研究となりつゝあるのである。筆者の見聞の範圍內では諸原住民間の差違はわが國の山梨縣人と長崎縣人との差違にも及ばない。

此の樣な甚だ稀薄な基礎に依つてメラネシアとは、ニューギニア New Guinea、ビスマルク諸島 Bismarck Arch.、ソロモン群島 Solomon Is.、ニューヘブリデス諸島 New Hebrides、ニューカレドニア New Caledonia、フィジィ諸島 Fiji 及びそれ等の屬島を指示する慣例となつてゐる。

わが國民が組織的に此の地方の智識を獲得する唯一の機會は中等學校の過程にあるが、その教科書は一樣に赤

道によつてミクロネシアとメラネシアを限り、一八〇度子午線をポリネシアとそれ等兩者との境界線となしてゐる事は注目に價する。斯くの如き地理的區分が往々にして政治的彩色の繪具となる傾向は充分に監視されねばならない。わが南洋委任統治領を島嶼の自然的配列を無視して、赤道を以つて妨害した事實や、一八〇度子午線を日米の勢力的境界線となすべしとの思想の母體は、斯くの如き歐米流の分割の思想ではなかつただらうか。

確に斯かる分割の觀念は境界の外なる、赤道以南の太平洋諸島に對する日本人の眼を巧に遮蔽した。

メラネシアが地域性を持ち得るとしたら、それは世界最大の島嶼たる濠洲の緣邊をなす從屬陸島であるといふ共通性に依るべきであらう。だがアジア大陸の東緣を爲す花綏列島と區別する爲には熱帶濕潤な風土を條件とすべきであらう。その場合にその樣な風土の爲に最も歐洲人によつて攪亂されなかつた島嶼が限定されるのである。ニューカレドニアはその豐富な鑛產の爲に、フィジィ諸島は卓絕せる位置と港灣の爲に、歐洲人の侵略による著しい變貌を受けてゐる。ニューヘブリデス諸島はそれ等程激しくないにしても、少くともソロモン群島に比較すれば歐洲的洗禮が強いが、尙ほ多分にメラネシア的である。從つて此所で言ふメラネシアからはニューカレドニア及びフィジィ諸島を除外したい。從來觀念されたメラネシアとの混亂を避ける爲に、之を「近接メラネシア」と呼ぶこととする。

その場合近接メラネシアは又新な共通性を有つてくる——卽ち大東亞戰下日本と濠洲との接觸點たる事である。

① 京都帝國大學地理學教室編「東亞地政學新論」(地理論叢第十三輯)所載、和田俊二「大洋洲への地政學的省察」(印刷中)

② Brown, J. Macmillan; Peoples and Problems of the Pacific, vol. I, N. Y. 1926 を代表として擧げて置く。

③ 共に長頭にして長身である。結局するに人種的區別はその容貌からのみ述べられるらしい。

④ Pittard; Les Races et l'histoire, 1924
古在學譯、昭和十五年、七四五頁

⑤ 野間三郎「南方問題の展開と大東亞民族」『地理學』第十卷、

四九四頁

⑥ Brown, J. Macmillan; op. cit. p. 3, p. 32, p. 34-42

⑦ Aubert de la Rüe, E.: L'homme et les îles, 6e éd., Paris, 1935
山口貞夫譯、昭和十六年、四六頁

二　メラネシアの放置

太平洋諸島に關する慣習を破つて新に提示した、近接メラネシアの一つの共通な性格は、歐洲文化の移植が他の地球上の被侵略地に比較して激しくない事である。それは故意の怠慢であつたか、或は單なる遲延であつたのか——搾取經濟を强行し續けた歐洲人にしては珍らしい事態と言はねばならない。

最も明瞭にそのやうな放置を裏付ける數字は、人口密度(附表一)と、原住民人口の全人口に對する割合(附表二)であらう。

附表　一　(一平方哩に對する人口密度)

舊關領ニューギニア(1938)	二・〇人
パプア(1939)	三・七
ニューギニア委任統治地(1938)	六・三
ソロモン(1938)	六・五
ニューヘブリデス(1938)	七・六
ハワイ(1940)	六五・六
日本南洋群島(1938)	一四六・〇

(括弧内の數字は調査年度を示す)

附表　二

	原住民人口の全人口に對する百分比	白人人口の全人口に對する百分比
舊關領ニューギニア(1936)	九九・三%	〇・一%
パプア(1939)	九九・三	〇・五
ニューギニア委任統治地(1938)	九八・九	〇・八
ソロモン(1938)	九九・二	〇・六
ニューヘブリデス(1938)	九二・八	二・二
ハワイ(1939)	五・一	二五・九
日本南洋群島(1938)	四二・〇	五七・九

(但、日本南洋群島の下段は日本人人口の全人口に對する百分比を示す)

之等の二つの附表①に於ける數字は各島嶼の特色を驚嘆すべき感度を以つて表してゐる。近接メラネシアの放置を明かに示す爲に、最も開發の進捗したハワイ八島と日本南洋群島とを併せ掲げた。ニューヘブリデスが人口

密度並に人口構成の百分比に於いて、僅か乍ら開發された土地への接近を示してゐる外、全く近接メラネシアは開發地と對照的である。ニューギニア委任統治地 Mandated Territory of New Guinea がニューヘブリデスの轍に追隨する傾勢を看取する事が出來るが、それは舊獨領の地であり、ニューギニア島の東北部とビスマルク諸島並にソロモン群島の一部たるキイタ區 District of Kieta を含んでゐる爲に他ならない。

斯かる近接メラネシアの比較的な未開發は唯單に人口に關する數字の上にのみ表れてくるものでなく、他のあらゆる面に於いても顯著である——例へば海底電線や重要航路の近接メラネシア回避、面積と財政との割合、面積と貿易額との割合、土地の耕地化の程度等。そしてその場合常にニューギニア委任統治地はハワイ及び日本南洋諸島の狀態へ、極めて僅少乍ら接近し始める傾向を現してゐるのである。或地域に關する文獻の多少は確かに該地域への人類の關心の尺度たり得るが、近接メラネシアが正確な地理的記述に乏しい事、並に乏しい中にもニューギニア委任統治地は割合に確固たる文獻[2]を持つてゐる事からも、如上の狀況が裏付けされる。そして近接メラネシアの白人らしからぬ放置の原因を探究せんとする時、此の委任統治地の傾向は一つの暗示を與へるものとして注意されねばならない。

此の土地が熱帶濕潤の地であつて、熱帶氣候への適應性の弱い白人の居住を困難にする事は確かにその原因の一をなしてゐるであらう。白人が熱帶氣候に對して順化力の鈍い事は屢々指摘された。[3] 更にそれに加へて高溫多濕性の風土はマラリヤ熱やレプラを猖獗せしめてゐるのである。一般に南海[4]に於ける白人の人口は一九三一年以後減少の途上にあつた。例へばフィジーでは五〇五八人から一九三八年には四一八八人に降下し、ニューヘブリデスでは一二四五人から九三五人へと低下した。增加した地方はニューカレドニア島とニューギニア島の二島に過ぎない。白人の減少はキーシング Keesing の言に依れば「熱帶農業に對する重大な頓挫と相關關係がある」のであり、「曾つて白人の手にあつた地位が半土着民、或ひは

土着民の手に移る著しい傾向がある」[5]からなのである。白人の増加した二島は全く鑛業開發の促進の所爲であつて、此の二島でも農業の大宗たるコプラの價格下落[6]は熱帶農業の危機を示した。白人減少に就いて統計的數字を缺いたソロモン群島も同じ危機に見舞れた。[7]之等は南太平洋一帶に於ける熱帶島嶼に於ける白人の後退を物語つてゐる。キーシング博士が引用してゐるトムプソンThompsonの豫言[8]は正に適中した。

斯くの如き白人の熱帶農業への不適性は彼等の目指す所を、埋藏せられた鑛物の採取に向けしめた。航空機を利用した金鑛の採掘[9]はニューギニア委任統治地の白人人口を一九二一年の一〇二六人から一九三八年の四五〇八人に躍進せしめた。此の人口增加は逆に白人の優勢を示すものゝ如くであるが、農業的土地利用に於ける敗慘者の金に狂へる姿に他ならないのである。白人が匙を投げたソロモン群島に於けるアジア人の活動[10]は此の事情を明かにする一例となるであらう。

近接メラネシア放置は以上の如き南海一般の趨勢に便乘してゐるのではない。特有な原因として先づ侵略の遲かつた事を擧げ得る。最も遲れて植民地奪取の闘爭に乘り出した獨逸が廣大な領土を獲得し得た事、永らく領有權が決定せられず遂にニューヘブリデスが英佛共同管理の伏魔殿 Pandemonium となつた事にもそれが表れてゐる。そして白人が既に廣大な土地を分割し終つた頃の獲得であり、且つ侵略者が人口密度の極めて粗な濠洲の所有者であつた事が、その開發を怠惰ならしめたと解しては誤りであらうか。しかも此の怠惰は曾つて彼等の最大の侵略據點たりし昭南市の背後の防塞としてジャングルを放置したと同じやうな効果を以つて、アジアの迫力から白濠主義を守衛する鉄條網の役割を近接メラネシアに振り當ててゐたのである。

更に自然的原因として、濠洲の緣邊を構成し乍らも濠洲との間に大壁礁 Great Barrior Reaf を控えてゐる爲に、船舶の交通が殆ど遮斷された形にある事や、數々の天災——火山爆發[11]、地震、津波[12]、暴風の頻發を擧げる事も許されるであらう。

① Keesing, Felix M.: The South Seas in the Modern World, 1941 の Appendix に依る。

② Reed, Stephen W.: The Making of the Modern New Guinea, Shanghai, 昭和十七年上海軍報道部により原稿押收印刷、原稿は1941年執筆。
Decker, J. A.: Labor Ploblems in the Pacific Mandates, Shanghai, 1940
新刊のみでも右の二勞作がある。

③ 和田俊二、「熱帶濠洲開發問題」『地理學』第十卷、五〇四—七頁。

④ South Sea 及び Südsee の譯。廣義には太平洋全體を指すも、狹義にはニューギニアからイースター島に至る太平洋熱帶の島嶼地域を示す。此所では狹義に用ふ。

⑤ Keesing, Felix M.: op. cit.
原田禎正譯、昭和十七年、一四頁

⑥ Reed, Stephen W.: op. cit., p. 194.

⑦ Bernatzik, Hugo Adolf: Südsee, Wien, 1939. S. 66

⑧ Thompson, W. S.: Danger Spots in World population, N. Y., 1930.

⑨ Reed, Stephen W.: op. cit., p. 203.
ニューギニア委任統治地の金產額は一九二六年の一、〇〇六八オンスから、一九三八年の四一、〇〇五八オンスへと躍進してゐる。

⑩ 小林織之助「南太平洋諸島」、昭和十七年、九九頁

⑪ 一例にニューギニア委任統治地首都ラバウルは昭和十二年五月二十九日火山爆發に依り大被害を蒙つて、遷都問題を惹起した位であつた。勿論之には强烈な地震を伴つた。

⑫ 一例にソロモン群島ではガダルカナル島に震央を持つ地震が昭和十三年四月三十日に起り、次いで起つた津波は多數の島民部落を海中に呑み込んだ。

三　メラネシア開發の可能性

近接メラネシア未開發の一因は更にその原住民の諸性質にも包含されてゐた。メラネシア人の獰猛性が喰人 Cannibalism の話題と共に流布された。[1] 確かにメラネシアの原住民は好戰的であるが、その暴行の前には白人共の惡虐が先行してゐるのであつて、言はば復讐にしか過ぎないものもある。然乍らその猛々しい鬪爭心はお互ひに隔離された部落生活に起因する。近接メラネシアの島々はその面積の廣大さから部族の隔離を生ぜしめ、その文化をも孤立化する傾向が認められる。[2] 之が漁業を事とする海岸人と、海洋恐怖症にかゝつた內陸人[3]とに原住民

を分つ常識を生み出した。實際に於いて彼等相互間には屢々戰ひが行はれ、その結果或る時は興味ある妥協が、[4]或る時はソロモン群島の一つマラ島 Mala or Malaita の東北方に見られるやうな逃避の爲の人工島嶼の築造[5]が行はれた。だがそれ等の敵意は瀬戸内海の島にも見られるやうな、同じ村落に居住し乍ら農民と漁民は何等の交際もせず、互ひに相手を蔑視してゐる感情が一段激化してゐるのみではないであらうか。皇軍の果敢な進擊に對して原住民が自發的に援助を與へたとの報道は、彼等の獰猛性が白人の暴行に對する憤怒の變容と見做し得る事を暗に示してゐる。

白人の非人道的行爲は二百年前からのカナカ Kanaka 賣買、十九世紀中頃の蘭領印度からする奴隷獲得の爲のニューギニア襲擊に於いて絶頂に達してゐる。ニューギニアは正にアフリカのギニアに於ける悲劇の再演地であつたのである。その結果勞働問題は近接メラネシアに於いても漸く深刻となつた。[6]熱帶性氣候の爲に自ら活動する事の出來ない白人に取つて、勞働力の不足は致命的な衰頽を齎した。

元來原住民は勞働の必要を感じないで過して來たのである。豐な天惠は彼等にあくせくと働かねばならぬ事を不審がらせてゐた。契約勞働者の多くは見知らぬ土地へ行けるといふ他愛もない喜びの爲に群に加つたに過ぎないのである。[7]從つて契約更新勞働者數は一九二四——一九二五年の九四七七人から、一九三七——一九三八年の五五八一人へと年々減少の一途を辿つてゐる。

斯くの如く白人の近接メラネシア支配の不當はその內部からも證據づけられつゝあるのである。然らば近接メラネシアは既にして行き詰りに遭遇してゐるのであらうか。實際白人達も殊にニューギニア委任統治地に於いて著しいのであるが、鑛業を中心として近接メラネシアの新たなる開發を企圖しつゝあつたやうである。傳へられる所では、舊蘭領ニューギニアには世界的油田の存在が主張され、一九四一年のボーリングの結果は多分な有望が明かにされた。又ソロモン群島の金鑛熱や錫鑛採掘も喧傳されつゝある。だが斯かる開發は實に跛行的で土地

の姿を誤るものと言はねばならない。然乍らその中からメラネシアは決して行き詰りに遭遇してゐるのではなしに、白人が行き詰りに直面してゐるに過ぎない事を學ぶべきである。太平洋の敵側の權威たるキーシング博士も「島々の資源は現在利用されてゐる以上の有望性を持つてゐるが、商業的政治的要因と地理上の孤立とが相俟つてその發達を阻げてゐる。現在の傾向では、金、石油、その他の特殊資源が地方景氣を生む以外には迅速に經濟的に發展する目當はない。[8]」と述懐してゐる。

現在原始的な住民の標本の如く取り扱はれてゐるメラネシア人は曾つては遜色なき文化の保持者であつた。農業を全然知らぬ對岸のクインスランド州 Queensland の原住民に對して、ニューギニアの住民は灌漑耕作を知つてゐた。近接メラネシアの隨所に見られる多數の用石構築や[9]、階段式灌漑耕作[10]は古い時代からの傳承である。そしてポリネシアに於いては現住民とは無關係と思惟される位傳承は失はれてゐるが、此所では今なほ實際に使用されてゐるのである。一例としてソロモン群島に於ける首塚(彫刻石造)の傳承的使用がある。[11] 此のやうなポリネシアとの差違はポリネシアの移動性に依る文化の消滅と、メラネシアの定着性に依る傳承との相違に他ならぬとする見解は大膽に過ぎるであらうか。メラネシア原住民の定着性は、前述の隔離的生活や移動傳說の缺如[12]によつて首肯し得る筈である。

斯くの如き近接メラネシアの過去の華かさは大いなる土地の潛勢力を意味するものではなからうか。而してその潛勢力の完全なる開顯は土地に則したアジアの民に依つてのみ成し遂げられ得るのではあるまいか。既にして最初契約移民として移り住んだ華僑の隆々たる現狀はそれの一證左たり得よう。

皇道の光被したその日、此の熱帶濕潤の地に現在のタロ芋耕作 Taro plantation より遙かに榮養に於いても優れた米作が復活するであらう。水產業も劃期的な躍進を遂げ、島の自然的配列を無視したあらゆる境界線は抹殺せられ、原住民と移住民との間には親和の蕾が見事な開花をするであらう。

之がわれわれの獨善に終らない爲に敵側の言葉を再び引用しよう。「日本人の如き國民ならば、農業定住、鑛産、水産開發、何れにせよその住む土地を十分利用し得ることは疑ない處で、日本領南洋群島の例にも明かであり、日本の經濟も西洋の市場以上にその生産物を吸收し得るであらう。」[13]

勿論此の敵の言葉は日本の理想を自國並に考へてゐる爲の錯誤を含んでゐることに警戒しなければならない。日本人に依る開發は彼等のやうに本國人の安樂の爲にのみ成されるのではないのである。更にその言葉は次の句を以つて終つてゐる。――「然乍ら白人にとつては、アジア人にかうした島に廣く定住されることは考へてもゾッとする。……中略……隨つて軍事的に敗北してその結果主權が移る曉に於いてのみ、アジア移民[14]に對する現在の制限は除かれるものと思はねばなるまい。」

① 例へば通俗的地理書たる、Peeps at Many Landes 中の一册、Fox, Frank: Oceania, Lond., 1911.

② Brown, J. Macmillan: op. cit. p. 5-6
又、斯かる隔離的生活は個々の地名はあつても島全體の呼稱がなかつたことにも表れてゐる。

③ 海岸人と内陸人とは、Hogbin, H. I.: Experiments in Civilization, Lond., 1939 によれば Coast man と Bush man であり、又 Hopkins, A. I.: In the Iles of King Solomon, Lond., 1927 によれば Bush peoples と Saltwater people である。

④ Aubert de la Rüe, E. 前掲、山口貞夫譯書、六九頁

⑤ Ivens, Walter G.: The Island builders of the Pacific, Lond., 1930 參照。

⑥ Haushofer, Karl: Geopolitik des Pazifischen Ozeans, Berlin, 1938.
佐藤莊一郎譯、昭和十七年、八四頁

⑦ 小林織之助、前掲書、一二五―六頁

⑧ Keesing, Felix M. 前掲、岡田禎正譯書、六〇頁

⑨ Rivers: The History of Melanesian Society, Cambridge, 1914.

⑩ Semple, E. C.: Influence of Geographical Environment, Lond., 1911, p.455.

⑪ Bernatzik, H. A.: Südsee, Wien, 1939. S. 75.

⑫ Codlington, R. H.: The Melanesians, Oxford, 1891, p. 20.

⑬⑭ Keesing, Felix M. 前掲、岡田禎正譯書、六三頁

結語

近接メラネシアの新生はキーシング博士の言を俟つまでもなく正に戰爭の問題である。そしてその最初の表れは昭和十七年八月上旬から昭和十八年二月初旬に亙るソロモン群島の決戰であつた。茲に注意すべきはその戰ひが單に近接メラネシアのアジアへの回歸をのみ目的とするものではなかつた事である。近接メラネシアの諸島嶼はそれ自身の存在よりも、世界との關聯に於いて考へられねばならない。

濠洲の周緣を型どる防壁たる位置によつて近接メラネシアは急激に敵の防衞線となつた。それは彼等が最も頼みとした防衞據點たる昭南を疾風の如き皇軍の進擊の爲に喪失した事によつて强調された。第一次大戰後益々露骨になつた米英合體の方向は一層鞭打たれ、印度洋に於ける脅威の爲に、濠洲は米國との結合を緊密化しなければならなかつた。それは濠洲が「英米的平和」Pax Anglo-Americana を希求する限りに於いて必然と言はねばならぬ。從つて今や廣大な面積に對して寡少な人口しか持たぬ濠洲にとつて、米國との連帶のみが唯一の生命の絆となつた。その絆が切斷される危機の到否は一に近接メラネシアの防衞に繫るのである。

皇軍の實力を過少評價してゐた彼等にとつて、迅雷の如き進擊の急速調は全く混亂の坩堝に彼等を投げ込んだ。然乍ら米國の力は漸くソロモン群島の一角に取りつくだけに成功した。もともとソロモン群島は昭南やパナマの如き地政學的重要地點ではない。それを一つの決戰場たらしめたのは全く米國の慌てふためいた我武者羅な力であつたのである。確固たる飛行基地の建設と同時に見事な轉進を成就した皇軍の優れた洞察を賞讃しなければならない。米濠連絡線の眞の遮斷はニューカレドニア、ニュージーランド、或ひはサモアにあるのである。

此の近接メラネシアの示す位置的性格は皇道の光が濠洲を被ふ時、豐な農耕地と化した北濠洲や、濠洲の重點たるその東南海岸、或ひはマオリ Maori の樂土ニュージーランドと、皇國日本との途中を扼する意義深いものと

なるのである。

斯くあるべき姿の實現には、頑迷なる者が跋扈する以上、戰爭が前提として絶對となる。現在のメラネシアは戰爭遂行の過程にあり、兵站地としての變貌は激しいと想はれる。だが正義の勝利、わが地理學の勝利の日の近い事を信じよう。

皇國に隣接するメラネシア――此の極めて粗雜な概觀が、そのメラネシア確認の踏石とならんことを。

（昭和十八年二月二十日）